



みらいっうしん

12月号

2018年12月1日
田園調布学園大学
みらいこども園
園長 長南 康子



子どもと目を合わせて

保育室のガラス越しに、紅葉した木々の美しさを見ることができます。
暖かな師走を迎えています。

さて、先日、テレビ番組で、フィギュアスケートの羽生選手の話が取り上げられていました。それは、ロシアの小さな男の子が羽生選手に憧れ、覚えたての日本語で話しかけているシーンでした。羽生選手は試合直後でしたが、疲れを表さず、男の子の前にしゃがんで、目をしっかり合わせ、片言で話す子の言葉を温かな眼差しで聴いていました。その後「ありがとう」と言いながら頭をなでて、その場を立ち去りました。一瞬の場面でしたが、相手を想う心がどのような状況においても自然に身についているという姿が印象に残りました。

日々、子ども達と接する私たちも、子どもの思いを知るために、子どもと同じ目の高さになることを、職業柄とも言えるかもしれませんが、自然に身に付けていきます。

目の前にいる大人を見上げて話を聞いたり、話したりする子どもの気持ちを考えると、同じ高さになった方がより思いは伝わりやすく、子どもは真剣に受け止めてもらえることに安心感をもつでしょう。子どもを尊重するという姿勢の表れでもあります。勿論、いつも、どんな時もととは言えませんが、時々、気に留めて子どもと同じ目の高さを意識して話したり、聴いたりしてみるとよいと思います。分かり合える幸せを感じることができます。

また、過日、東京大学においてオックスフォード大学教授による講演を聴く機会がありました。「幼少期における経験と長期的な発達」というテーマでした。現代社会では、認知（リテラシー、計算式など）と非認知的能力（ソーシャルスキル、自己調整など）の両方が重要なことや能力を向上させるにはどうしたらよいのか？ 幼児教育の役割は？ など、大変興味深い内容でした。特に、効果的な幼児教育、その答えは『やりとりが発達を促す』という話は、心に強く残りました。家庭でも幼児教育の場でも、人とのやりとりが成長に帰結するというのです。このことが、家庭での子育ての在り方や幼児教育の実践において、質の高さとなり、子どもの発達に影響を与えることになるとの考えでした。

子どもと目を合わせ、肯定的に笑顔で頷きながら、全注意力をもって話を聞くことの大切さを改めて学びました。

これから年末の忙しい日々になりますが、成人期に関係してくる幼児教育の重要性を心に留め、子ども達と気持ちが通い合う喜びを感じる瞬間を重ねていきたいと思います。

(長南)

暖かい日差しの中、園庭で「せーの！」の掛け声が何度も響いています。にじ組の子どもたちに混ざり、ほし組やそら組の子どもたちも一緒に大縄跳びをしていました。「あ〜！（残念）」の声が漏れるたび、にじ組の子ども達は、回し方を工夫したり、並び方を調整したりしています。年下児は、仲間に入っていることの喜びが満面の笑顔からあふれ出ていました。跳べなくてもこの体験は、子どもの情緒をどれだけ豊かにしているのだろうとしばらく見ていると、「やったー！」の歓声。息がぴったり合う瞬間が1回だけあったのです。楽しい気持ちが継続へ、そして次への意欲につながる成功体験！一足早いクリスマスプレゼントをもらえた気分になりました。

(中城)



芸術作品：「葉っぱのオバケ」4歳児